

## 自然史学会連合ニュース

「自然史学会連合第7回シンポジウムー遺体が語る自然史ー」開催のお知らせ

日時：2001年11月10日（土）午後1時から5時

場所：国立科学博物館 新宿分館4階講堂（JR大久保駅北徒歩5分、新大久保駅北西徒歩8分）

「死」は一般社会においてはネガティブな概念であり、そこに生じる「遺体」はあくまでも日常の社会生活とは縁の遠い存在である。しかし、ナチュラルヒストリーは、まさしく「遺体」を研究対象とすることで発展してきた歴史を有する。「遺体」に取り組む最前線の研究者の研究成果を、一般社会人・学生を対象に平易に紹介する。分野としては、動物学・植物学・古生物学・医学・解剖学・考古学からの話題提供がなされ、これら各分野を有機的に結び付けてきたナチュラルヒストリーの全体像を紹介する機会となる。また分析型生命科学が隆盛をきわめるなかで、研究対象としての遺体を取り巻く環境は大きく変わりつつある。参加する社会人や学生らとともに、多彩な研究成果を自然科学にもたらしえてきた「遺体」の現在・過去・未来を議論する。

- |                                   |                       |
|-----------------------------------|-----------------------|
| 13：10～ 遠藤秀紀（国立科学博物館 動物）           | 遺体が創る科学               |
| 13：55～ 中島 功（昭和大学 歯 口腔解剖学）<br>（休憩） | 遺体が語る「本人も知らない自分」      |
| 14：50～ 塚越 哲（静岡大理 生物地球環境科学）        | 太古の遺体ー化石がもたらす生物進化の情報ー |
| 15：35～ 辻 誠一郎（国立歴史民俗博物館）           | 遺跡出土の遺体が語る人の生活と環境     |
| 16：20～ フリーディスカッション                | 遺体標本で博物館の高度化を図る       |

参加申し込みは不要。途中からでも自由に参加できます。

問合先：〒169-0073 新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館 遠藤秀紀（自然史学会連合事務局）

tel 03-3364-2311, 7127 fax 03-3364-7104 Email: endo@kahaku.go.jp

### ブラックバス政策に関する要望書の提出

平成13年2月19日に自然史学会連合（加盟35学協会）から農林水産大臣あてに以下の要望書を提出しました。

「貴省所轄の水産庁では、これまでブラックバス類（オオクチバスやコクチバス）を自然水域から駆除する政策を進めてこられました。中禅寺湖や奥只見湖では実際に駆除の効果が明白に認められており、関係者のご努力に敬意を表する次第です。しかるに最近の報道等で、水産庁はこれまでの管理政策を見直し、オオクチバスに対する漁業権を緩和し、公的に容認する水域を一気に増加させる「すみわけ」政策に転換すべく準備中と聞き及び、たいへん驚いております。自然史学会連合は現状での政策転換に反対します。もし、この政策転換が現実になれば、生物多様性条約締結国としての責務を負う我が国において、水生生物の多様性の保全に重大な問題が生じるからです。オオクチバスによる日本の在来水生生物に対する食害の被害の深刻さは各地から報告されております。政策転換によって全国に公認釣り場が設置されれば、心ない一部の釣り人などが本種を持ち出し、許可水域以外の自然水域に移殖する危険性が増大します。実際にここ30年にわたってオオクチバスが、さらに最近10年弱の間にコクチバスが急速に生息水域を拡大した主な原因に、生息水域から非生息水域への意図的な放流が指摘されています。また、少数の公認釣り場に大勢の釣り人が押し掛ければ、資源維持のために大規模な種苗生産施設が必要になり、そこで生産された種苗の一部が不法な移殖に利用される危険性も生じます。外来魚の違法放流を防止することを目的として公認釣り場を設置することは、世界的に例を見ず、保全生物学上誤った政策だと思えます。違法放流を防止するために、これまでの駆除政策を強化しつつ、オオクチバスの移殖放流はもとより、飼育や譲渡についても適切な規制を加えることが不可欠です。政策転換は違法放流の実行者を是認することになり、それは生物多様性条約締結国と

してもつべき理念からも明らかにはずれる世界に恥ずべき退歩であると言わざるを得ません。

自然史学会連合は、今回の政策転換を心から憂慮するものです。大臣におかれましては、上記の諸事情をご勘案いただき、適切にご判断をたまわりますようお願いを具申する次第です。」

### 地域博物館アクションプラン

自然史学会連合連合の遠藤秀紀氏（国立科学博物館・動物研究部）は学術会議動物研連を中心に、大場達之氏（千葉県立中央博物館）、濱田隆士氏（福井県立恐竜博物館）と私的な懇話会を開き、地域博物館の研究環境を高度化するための課題を集めて発表し、勉強会を開きました。学術会議研連のこういった運動と呼応し、自然史学会連合の地域博物館アクションプランは、博物館の研究強化のための具体策を提唱して参ります。どうぞ参加各学協会の皆様から、アクションプランへの積極的なご発言・ご指導をお願い申し上げます。

### 地域教育アクションプラン

今年度試行段階としての活動を始めました。今回は、教育現場の先生方の窓口として、自治体レベルの教育研究会（教研）理科部会を選びました。実際は、連合運営委員のつてを頼りに、千葉市教研理科部会の夏期実技研修時に連合派遣講師による実技研修を組み込んでいただきました。講師は、連合運営委員でもある遠藤秀紀氏（日本哺乳類学会、国立科学博物館）をお願いいたしました。このプランは、現場の先生方から派遣内容について希望を出していただき、連合内で適任者に講師をお願いする方式をとっていますので、今回も市教研からの「動物解剖について」という希望に応じた講師派遣でした。派遣費用や材料費は連合の負担です。

当日は21名の先生方と生徒1名が実習にあたり、そのほか理科部会役員の先生方も交えて、てきばきと作業が行われました。自然史学会連合からは遠藤講師の他、このプラン担当の森田氏（千葉中央博物館・連合運営委員）と西田氏（中央大学・連合運営委員）が参加しました。中学における解剖実習の意義や基本理念などを説明しながら、各自1頭ずつのマウス頭部を約2時間かけて解剖しました。肉食動物の例としてタヌキとハクビシン1頭ずつの頭部も提供され、希望者が利用しました。

動物を解剖することが罪悪であるような論調や、解剖無用論も一部にありますが、自らをヒトという生物として認識し、生命を構造と機能、多様性という観点から実体験を通じて理解する上でも、解剖実習の教育効果は大きいものがあります。動物でも植物でも、解剖実習に必要な知識を持った先生が減少している傾向は、大学教育にも問題がありますが、大学でそのような実習を行える教員が減少していることも事実です。そのような点を補うために、連合の地域教育プランは小さいながらも一定の役割を果たせるのではないのでしょうか。

今回の経験をふまえ、地域教育プランの実効性、連合としての活動にふさわしいものかどうか、継続するならばどのようなかたちが最善か、などを議論してゆきたいと思います。現場の先生方からのご意見を集約し、役に立つ活動とは何かを見きわめてゆくことが必要ですし、事務局構成員が定期的に入れ替わる連合の組織内で、学会の協力を効果的に引き出すことが可能かどうか、などを具体的に煮詰めなければなりません。加盟学協会内でも具体的に議論していただきたいと思います。今後も自然史教育という共通の目的に沿って、連合を活用いただけるようなご意見をいただけますよう、お願いいたします。

### 自然史学会連合ホームページ

<http://www.soc.nacsis.ac.jp/ujshh/main.htm> には以下の情報が載せてありますのでご覧ください。なお上記の記事内容もご覧ください。

- 1) トップページ目次、2) 自然史連合とは？、3) 運営委員・顧問、4) 運営の規則、
- 5) これまでの活動、6) 連合シンポジウム、7) 関係学協会のシンポジウム、8) 連合の課題、
- 9) 関連出版物、10) 所属学会へのリンク